

遂には主僕共に相打つて得る所皆無たるに至らん、ウイバルフオースの説の如きは必ずや此結果を惹起すものなりと云々。加ふるに當時佛國革命の餘燼、未だ熄まず、英國が曾て佛國の自由を叫んで、殘虐を行ひ、共和の議論盛にして、其弊遂に堪ゆべからざるを見るもの、こゝに自由と共和とを混同し、自由を唱ふるものは共和黨にして、共和黨は即自由を唱ふるものなりとの感情、今尚ほ社會の全般に行き渡り居りしかば、奴隸の自由人類の同胞を唱ふるウイバルフオールの如きも、遂に共和政治を唱へざれば已まざるべしとて、杞憂を加へ、正義の議論も爲に塵芥の如く取扱はれたのであつた、さればピット、ボルク、フォックス等の大政治家が左祖吹鼓せしにも係らず、國會議場に於ては、百六十三對八十七の少數にて、敗北の運命を招きたることは残念の至りであつた。然れども眞理は遂に徹せざるを得ず、正義は遂に勝たざるを得ず、則ち千七百九十六年の國會に至り

ては、遂に過半數を以て第一次會を通過し、第二次會に至りて敗れたりと雖も、其趨勢の指す所、遙かに曉星を望むの感があつた、思ふに此間ナポレオンの大戦争あらざりせば、ウイバルフオース案は二三十年後を俟たずして、必ずや通過したるに相違なきも、彼れ世界的大戦争の爲めに、惜むべしウイバルフオースは又々須らく時の來るを俟たざるを得ざるに至つた。ナポレオン戦争時代の状況を知らるものは、是れ英國が危急存亡の秋にして、獨り奴隸の解放とは曰はず、一機事を誤れば、英國を擧げて盡く黒奴の悲境に淪ましめねばならない際であつた。然らば即ち人心の之に狂し、之れに激し、其僅かに千四百萬の人口を有し、其僅かに四五百萬の壯丁を有したるに係らず、遂に百萬の大兵を擧げたる英國の大奮發大騒動を見ても知るべきであつた。ウイバルフオースは之を觀て取り、徐ろに策を爲すの議に出で、此に一書を著した、題して「現今我上中流社會の基

「基督教は果して眞の基督教なるか」と云ふ。其書の精髓に曰く、我英國現下の上中流の社會は果して基督教社會なるか、然らば即ち問はん、基督教は何を教ゆるものなるや、眞理なるか、愛心なるか、基督の心なるか、神の意なるか。基督教果して然らば、何んぞ眞理に反し、人道に反し、神意に反したるもの我國に多きぞや、若し夫れ之を基督教社會と曰はゞ、基督教は正さに貪婪、不義、不道の教たるべしと。慷慨一番摘々事實を擧げて之を指示した。而して更らに社會の同情を失ひ、友人の感情を損ふを顧みなかつた。然らば當時の英國は如何に此書に對したるか、一般の眼より之を見れば、良言口に苦しの言に洩れず、全く之を放棄したるが如く見えしと雖も、昔イザヤが我れ獨り遺されし如く、感せし時すら、以色列には尙ほ數十人の義人があつた、歐洲の中世如何に暗黒なりしと雖も、ルーテルの起るや靡然として復之に靡き來るの生命があつた。然らば即ち流石の英國、如

何に衰へたりしと云ふと雖も、基督の生命尙ほ地下に伏するものありしにや、此書半年を待たずして、第五版に上り、直ちに引續いて五十版を重ねるに至つた。エドモンド・ポルク其死する前二日、此書を読み、天を仰いで神に謝して曰く、我爾に謝す、是れ英國には必須の物たり、義を聽いて起るもの必ずあらんと云々、又ジョン・ミルトンも、ウイルバルフォースの勇氣に驚き、吾人は尙かかる道徳的大勇氣の偉人を有するに誇らざるを得ず云々。ウイルバルフォース自らも一書を認めて、其友人に送りたる書中に云へることあり、曰く嗚呼予は今日ワイトの一牧師より、我が書の大に彼を益したる感謝狀を得たり、拙著元より取るに足らずと雖も、予は神の祝福を感謝せざるを得ずと、而して彼がワイトの一牧師と云ふものは誰ぞ、之れ實に當時有名なるリチモンド氏其人であつたのである。

ウイルバルフォースは此間、又大に海外傳道の計畫をなし、ウキリアム・ケレ

一に同情を表し、彼を東印度協會に紹介し、彼を印度に送らん事に盡力したり、不幸にして事就らざりしと雖も、爾來益々異邦傳道、即ち當時に在りては暗黒界と思はれたる、異邦の人民を救はんと欲し、奴隸を憐れむ同感同情を以て、獨り印度東洋のみにあらず、萬國到る處の同胞兄弟の沈淪墮落せるものに、天の光明を興んと欲し、遂に千七百九十七年、大議論を以て反對黨を排し去り、此に先づ内外傳道會社などを起した。又聖書書類會社を起す事にも盡力し、之が爲めに金と時とを費すことを惜まなんだ。ウイルバルフォースは、其精神は大にメンヂストに感化されしものありしと雖も、亦決して國教を去つて彼に屬せず、依然監督教會の下に在つて忠義の心を表した。尤も其の慈心の深きこと、同情の念切なる所より、終始國教即ち監督教會が罵詈雑言を罵罵せず、又國教が常に天主教信者を虐壓し、之れが自由を奪ひ、之れが人權を蹂躪するを見て、

心太だ樂まず、此點に於ては常に國教に反對した。以て其人と爲り如何を見るべきである。

斯くてウイルバルフォースは、慈愛の心より流れ来る社會改善の爲めに、己の出來得る限りの金と時と力を盡して、百般の事業に其助勢を與へたが、しかも其間一日として己が自任の奴隸運動に對しては、決して其心を撓む事がなかつた。其廢案たるべきを知ると雖も、一年一年として國會に同議案の提出を怠ることなく、敗又敗を重ね重ねて、前途尙ほ遠遠たるものあるに係らず、更に勇を鼓すること一番、斯て千七百九十九年の國會に迄至り、此時更に又亦大敗し、彼の同志であり又後援者たりしビットも、其後故ありて、暫時政府に在らざりし爲め、奴隸廢止の議論益々其聲價を落し、殆んど絶望の姿となつた。此時友人にして國會議員なるハッセル氏、宇氏を執へ、悄乎として謂て曰く、奴隸廢止の問題たる、

元より正義の動議にして、我等が必死に盡力すべき問題なること、今更喋々する所なかるべし、只夫れ如何せん、今日の人民たる、到底抽象的の理論にて、導かざるべきものに非ず、盡く皆利害損益に依ずんば動かさず、君請ふ少しく顧みよ、他に爲すべきの事業方さに多し、暫く徒勞の業を止めて實地行はるべき正義の業に、君が全腹の熱心を翻せば如何と。時に宇氏悠然として答て曰く、ハツセルよ、請ふ暫く言ふを止めよ、今にして我時始めて来るなり、我は必ず之を通過せしむべし、否な速かに之を通過せしむべし、一成一敗は天下の事、機微已に現はる、今日迄こそ徒勞の如けん、而かも遂に徒勞に非ず、其人心の反撥し来る正さに眉髪の間在るべしと云々。果して千八百四年ピットが復び首相に復せし時、奴隸の問題復此に大勢力を復し來りて、三十三對九十九の多數を以て、突然國會を通過したり。然も貴族院に廻附せらるるに及んで再び又大敗の結果に歸し、遂に成

案たるに至らざりしと雖も、其下院に於ける大多數の勢力ありしより之を見れば、其議論の漸く揚り來りたる者あるを見るべきである。斯くて其翌年は如何なる故にや、第一讀會を通過したるに係らず、第二次會に於て七十七對七十の僅かなる小數にて敗れた。然れども其又翌年、即ち一千八百六年に於ては、フォッタス、並にグランビル等の賛成演説により、又大に氣焰を復し來り、遂に先づ英領なる新殖民地には奴隸使役を禁ずる法令を出し、又英領以外他國へ奴隸を賣ることを禁ずる旨、英國の臣民に命ずるの議案を可決したり。然れども當時未だ所謂奴隸賣買禁止の嚴命を、舊來の殖民地全般に及ぼす事は出来なかつた。

其翌年千八百年は、之れ宇氏が傳に於て吾人が記憶すべき一大成功の年であつた、此年ピット死す。宇氏は正に其右腕を失つた、然れども其左手は尙ほ存した、グランビル・シャアプである。シャアプはピットの如き聲望を有たなかつた、又

其手腕をも有たなかつた、然れども其の奴隸問題に熱心なりし事は、ビットに増すこと幾十倍であつた、其彼れが一人の黒奴を道路に拾ひ、之を憐んで治療を施し、遂に之を自由の身となしたるが如き、彼が直ちに奴隸禁止會の會長となり、之れが爲めに其身を抛ちたる如き、以て其の精神如何を見るべきである。此年首相ビット死するに及び、グランビル・シヤアブ之を繼いだ。時にシヤアブ以謂らく、我は此間必ず奴隸禁止問題を通過せしめざるべからずと。然れども茲に常に禍をなすものは、貴族院なり、我先づ彼を打たずんば、此舉遂に徒勞に屬せんと。於此乎先づ同案を貴族院に廻はし置き、總て自ら之に出席し、所謂シヤアブが一代の大演説を試みた、其間數時間、終て兼て期したる質問辯難矢の如く來り、雨の如く下つた。シヤアブ毫も屈せず、遂に波濤の辯を捲いて盡く之を撃倒するや、喝采の聲四面に沸き、忽ち全局的奴隸廢止の議案は、始めて貴族院を

通過するに至つた。而して其直ちに下院に廻はり來るや、是又一瀉千里の勢を以て、十六對二百八十三の大多數を以て歡呼の中に直ちに可決せられた。此時兼ねてウイルバルフォースの知友にして、當時副大訟師たるサー・サミエル・ロミリーは欣喜の餘り議場の中央に昂立し、大聲に叫んで曰く願くは今日の大出來事をして、青年なる國會議員の教訓たらしめよ、如何に道德的の賞褒は功名的の賞褒に勝るかを、蓋し此時滿場破るる計りの大喝采にて、宇氏を賞賛するもの引きも切らず、嘗に宇氏に對ふて賀するのみならず、是れ英國の大榮譽、英國人の正義が遂に其慾に打勝ち得たる大記念日なりとして、皆之を祝賀したからである。宇氏も其後人に語て曰く、予も亦欣喜の餘り、感極りて心充ち、茫乎として殆んど前後の狀況を看取する能はざりしと云々。議會散するや、直ちに祝賀を呈せんとしてバアレーシヤアドなる宇氏の邸宅に馳せ往くものは、第一首相グラ

ンビル・シヤアブ、ザカアレ、マコーレー、ヘンリー・クローラムランド兄弟。ウキリアム・スミス、ヘンリー・サルントン等、何れも皆當時大政治家の面であつた。宇氏の面目察するに餘りあり。時にヘンリー・スミス戯れに語つて曰く、「何んと十六人の氣の毒さよ」と斯く云ひつつ指を屈して其反對少數者の姓名を數へ挙げ始めたので、宇氏傍に在り、顧みて之を制して曰く、請ふ之を止めよ、而して寧ろ二百八十三名の姓名を讚美せよと、諸氏皆其雅量と洪徳に服せしと云ふ。

願れば是れウイルバルフォースが、始めて奴隷禁止の問題に其決心を投入せしより、茲に二十一年目なり、其熱誠と忍耐實に驚くに餘りある。然れども宇氏尙ほ奮闘せざるべからず、何んとなれば一千八百六年に決定せられしものは、漸く其新殖民地に奴隷を使用する事、並に英領以外他國へ奴隷を運ぶ事を禁じたの

211

み！即ち一局部の奴隷禁制を見たるのみ、又其翌年即ち千七百八八年に於ては、右の如く全局的の禁制を布きしと雖も、之れ漸く奴隷貿易の一事を禁せしに過ぎず、其全く奴隷を解放し去るの一事に至つては、前途尙ほ遼遠なりと謂はざるを得なかつた。ウイルバルフォースは、功尙一簣を缺いて満足するものでなかつた。其會てウエスレーに勵まされたる如く、唯り英國のみならず、米國に於ける奴隷をも解放せしめんと欲するものであつた。然れども當時年漸く老ひ、身亦尙弱なり、多年の盡瘁漸く其疲れを現はし來りて、又激務に任ゆべきに非ず、加ふるにピット既に逝き、シヤアブの内閣も亦其翌年交迭し、議場に於ては、恰かも兩手の腕を失ひたるの感があつた、而して其年議會は俄然として解散された、其私心より之を曰へば、再び國會に出づるの慾望は消せた、然れども丈夫の一たび志を決して立つや、元より斃るる迄直進直行の踵を回すべきに非ず、友人の勸む者あ

り、暫く國會を退き、其身を養ふべきを以てしたるも、肯みず、又勸むるに適當なる後任者を出す事を以てしたるも、其心に安せず、皆曰く、宇氏が選挙區たるヨークシャイルより今回二人の強敵現はれたり、孰れも皆富豪貴族の徒、一をロード・ミルトンと曰ひ、一をラセリスと云ふ、而して何れも黨派の大勢援を控ゆ。宇氏は常に中立たり、中立者の勝を制し難き中外皆一なり、宇氏或は夫れ敗を取らんか、宇氏は曾て富豪家たりし、若かも今は博愛慈善の爲めに其資産を傾け盡して、餘蘊あるなし。敵は稱す、今回の競争の爲めには金錢を吝まず、幾千萬圓の運動費も亦顧みる所に非ずと、宇氏尙ほ能く之に當るを得るか、知人危惧し、同情の人手に汗を握る。若かも宇氏は平然として答へて曰く、勝敗は予が知る所にあらず、予は唯々精神の在らん限り盡さんのみと、巍然として又退くの氣色がなかつた。既にして競争始まれり、金錢の舞ふ所、凡夫皆籠絡せられ、

黨派の軋轢甚しくして、氏愈々孤立の位地に立ち、失敗の徵候、四面楚歌の裡に現はれ來つた。時に宇氏書を其妻に贈りて曰く、如何に我運命が決するとも、請ふ其心を動かす勿れ、予は只正義と神に任せて晏如たり云々。斯くて投票期限十五日の間、其始めは元より宇氏に黨たるもの十の一二に留まりしも、英人の義氣尙ほ未だ亡せず、正義の心尙ほ未だ其地を去らざりし爲めにや、俄然として風潮一變し來りたるものは、即ち宇氏の爲めであつた。友皆曰く、吾人は斯る正義の人を棄つるの耻を取るべからず、吾人は多年宇氏に黨したるものに非ずや、何ぞ今日に及んで急に其議に背き、金錢に眼眩み黨派に心奪はれて、俄かに醜態を現はすべきやと。於此乎宇氏の爲めに寄金するもの、六萬四千四百五十五磅の多額に及び、宇氏のために運動するもの亦激烈を極め始め、宇氏に左袒するもの日に其數を増し、若し夫れ敵手の爲めに、車馬の悉皆買收せらるゝある所には、人民

舟を舩して其選舉者を送り、驢馬に鞭つものあり、歩いて急ぐものあり、而して十五日の最終日に至りて、其投票を檢し來れば、勿論遙かに強敵を抜いて大多數を占めた、此時敵手の費せしもの二十萬磅、而して宇氏の費す所僅かに寄附金の半額即ち三萬磅に過ぎざりしと云ふ。

斯くて宇氏復た議會に在つて、第二の議案を提出し始めた、曰く奴隸の解放即ち是なり、以前は奴隸賣買の禁止なりしが、今回は奴隸解放の自由なり、奴隸賣買は今後の舉動を制するにあるを以て、或は夫れ行はるべしと雖も、奴隸解放の一事に至りては、財産を人民の手より奪ふに同じく其實行最も難し、果せる哉此議は又々敗案に敗案を重ねたり。彼グラッドストンの如きは、最も善に與みし易き人なりしが、若かも當時奴隸解放の一事に至りては、容易に左袒せざりしを見て、亦其難事たりしを知るべきである。斯くて千八百十五年、即ち奈翁一世

がセント・ヘレナに流されて後、埃都維也納の大會となり、同盟國主が英國を榮として其倫敦を見舞ひし時、宇氏機を見て此等の諸帝王に謁し、露帝にも説き、普王にも説き、遂に之れが同情を得るに至つた。爾來歐洲の各國が又英國に倣ふて奴隸賣買の禁令を出したるが如き、宇氏與りて力ありと云はねばならぬ。然れども奴隸解放の議論に至りては、又容易に決せらるべきに非ず、一年又一年、敗北又敗北、遂に千八百二十五年に至つた。此時宇氏年六十六。前後國會に在ること四十四年間、如何に精神滿つるものありと雖も、元より鐵軀の質に非れば、遂に議場に出でて又風濤の辯を捲くべくもなく、後任をフォールウエル・ボツクストンに譲り、愈く國會を去るに至つた、而して其去るに臨み一言を遺して曰く、夫若し予に壽を借さば、予は奴隸の解放を見ずして死せざるべし、予は老い且つ衰へたり、然れども正義は老はず、又衰へずと。

千八百二十九年に開きたる奴隸禁止大會には、會長として之を司會した。之れ宇氏が此問題を提して公衆の前に出でし最後にして、時に年七十。之より後は閑居して客に接し、人を通じて、尙も奴隸問題に其一念を注ぎ居りしが、其間不慮の災難あり、博愛の爲めに費し果して、僅に残したる土地も、書籍館も、盡く皆賣却せざるを得ざる悲境に陥つた、而も尙依然として其幼年時代より維持し來りし溫容慈顔を失はず、其容貌益々天使の如く靈化し進みたりと云ふ。

千八百三十三年七月廿六日の金曜日、之れ宇氏の傳に於て特筆大書すべき大紀念日であつた。此日宇氏の後任たるバックストン氏は、此問題の爲めに、大動議を起し、畢生の大演説を試みて、愈々奴隸解放案を斷行せしめ、國庫より二千萬磅を出して之れが贖金となし、之を奴隸主に拂ふ事として、終に此案をして上下兩院を通過せしむるに至つた。此時ウイバルフォース之を聴くや、直ちに俯し

て神に謝して曰く、「神に謝す、予は今日迄生存せしめられ、英國が歡んで奴隸解放の爲に、二千萬磅を供するの目を見せしめられたり」と。斯く言ひて後、三日を隔て、次の日曜日、即ち千八百三十三年七月廿九日、飄然天風に駕して帝郷に去つた。嗚呼何等の神聖ぞ、何等の豪勇ぞ、されば英國は爲めに動き、兩院議員正式に依て葬送を營み、之を「ウエストミンスター」寺院の聖墓地に葬る、此日天地亮豁、恰かも自由と榮光とを歌ひつつありしかの如く見へしとは、或る傳者の記する所。ヨークシャイアの人民は、其名譽を表して盲院を建て、故郷ホルに於ては、郷黨相集つて一大紀念碑を建造し、遙かに太平洋を隔てて、米國ニユーヨーク並に西印度に於ては、數十萬の黒奴其喪を聴き、殊勝にも相傳へて喪服を著したりといふ。嗚呼偉人の徳亦大なりと謂はざるべからず。然れども叨に其徳をのみ思ふこと勿れ、寧ろ其十四歳の時、既に愛腸慈眼を抱き、義氣禁する能

はず、没書の厄に遇ひたるにも係らず、尙且つ奴隸の爲めに一論を新紙に投じたる義心の在る所に注意せよ。又其二十歳に及んで豁然墮落より蘇へり、自ら治めて而して人を治めんと欲するの至順を悟り、苦悶奮闘盡く多年の非を改め、而して慨然其志を奴隸救助の道に傾けたる大丈夫の心膽に意を用ひよ。其の四十年間、國會に戦ひ、失敗又失敗を重ねて、毫も屈する色を見せず、予は老ゆるも正義は老いず、予は衰ふるも真理は衰へずと叫びたる、一大信念の源頭に溯り來れ。其徳自然に溢れ、其業の千載に遺るものあるを見る、決して偶然に非るを知らん。嗟呼今や奴隸は天下在るなし、若かも滔々たる下民の狀態、殆んど奴隸に類するもの多きに非ずや、傳を結んで悵然亦奮然、世を隔てて宇氏を懐ふの情や切なるものあり。

六、シャフツベリー侯

1885
1801
84

シャフツベリー侯は、一八〇一年四月二十八日に生れ、一八八五年十月一日に死んだ。彼の傳記者エドウィン・ホッダーは彼の死んだ時の事を記して、

「秋の明るい日射が、裝飾としては何も無い田舎村の小さな教會の窓ガラスを通して流れ込んで居る。常磐木を以て飾られた教會の丸天井の入口に、一ツの棺が置かれて居り、其棺は花を以て覆はれ、花の中に埋もれて居る。其花は、上は王侯から下は百姓に至るまで、又た上は貴族から下は一介の物賣りに至るまで、あらゆる階級の人々から贈られたものである。齡入句を越した一人の老人が、今や

彼の祖先の眠る墓地に、葬られやうとして居る。棺の周囲には、息子や、娘や、親類や、友人や、小作人の、僅かばかりの人々が立つて居るばかりであるが、然し全英國の國民が、今此の老人の葬式を哀み、此の棺が其の告別式の行はるゝウエストミンスター・アベイの前に來た時、此の棺の周圍に群り集つた數萬の人々は、男でも、女でも、子供でも皆夫々に自分の事のやうに哀しみ泣いた。社會のあらゆる階級教會のあらゆる部分、國內のあらゆる機關、其等は一として彼の感化を蒙らぬものは無い。六十年の長い生涯を通じて、彼は貧窮の者、壓へられた者の爲めに、第一線に立つて働いた戦士であつた、又た靈と肉と境遇に悩める全ての者の友であり援助者であつた、殊に彼は、勞働者階級の要求と福利に關係するあらゆる運動の指導者であつた。そしてウエストミンスター・アベイに群集した數萬の人々が、萬斛の涙を濺いで居る時に、彼によつて過大な勞働から救はれ

た勞働者、彼によつて保育された孤兒、彼によつて救上げられた社會の落伍者、彼によつて自由にされた壓へられた人、彼によつて着物を與へられた貧しい子供、彼によつて新大陸に新生活を拓いた移民、彼によつて鼓舞された基督教の傳道者、彼によつて靈肉の危機を脱出した青年、此等幾千萬の人々は、一齊に一日の仕事を休んで、哀悼の意を表し、且つ、縱令神が神の僕を召給ふとも、神の御事業が今後も續けらるゝ事を、熱禱したのであつた。」

と叙した。老人とは、云までもなくシャフツベリーの事である。彼が八十五年の長い生涯は、篤く神を信じ、哀れなる英國の同胞の爲めに、日夜焦心苦慮し、挺身して同胞救済の爲めに奮闘し、死に至るまで屈せなかつた、忍苦精勵の生涯であつた。彼が死んだ時に、彼の恩徳に潤へる幾千萬の同胞が、心からなる哀悼の意を表して、恰も慈父に別れた如くに哭したのである。シャフツベリーは、英

國の十九世紀史に燦として輝き、其の光芒千載に滅せざる、偉大なる社會改良家である。

さても此にリチャード・オーストルと云ふ志士があつた。シャフツベリーより長ずること十二歳、奴隸解放のウイルバルフォースより若きこと三十歳、即ちウイルバルフォースの弟子にして、而してシャフツベリーの先輩である。彼一日黒奴廢止の爲めに、諸方を遊説して大辯論を試み、家に歸りて氣焰未だ衰へず、尙ほ友人を執へて論ずる所あらんとした。時に友人笑ふて云ふには「君は何ぞ黒奴の爲めに熱すること甚しくして、白奴の爲めに冷かなること氷の如くなるや、黒奴は遠く西印度に在るも、白奴は近く眼下に在る、一は異人種にして、一は同胞である、一は他國にして、一は自國である、君は何故に遠近親疎の別を辨せざる事甚しきや、予若し力あらば、寧ろ眼下自國の白奴を救ふことに盡力せん、

1

君何ぞ一念を此處に注がざるか」と。リチャード・オーストルは實に此の時まで白奴の存在を知らなかつた。況んや其の暗黒界の状態に於ては知る所無かつた。是に於て頗る奇異の思をなし、當時友人の説き出す白奴の状況を半信半疑の間に置き、其日は其儘に過せしが、以來思を此に注ぎ、追々白奴の存在并に状況を探查するに、其探查の進めば進む程、悲惨殘虐、人の目未だ見ず、人の耳未だ聞かざる、實に非常なる地獄の状況たることを認むるに及んで、彼の心は直ちに黒奴より轉じて白奴に移り、爾來激論の舞ふ所、全く此一點に留まるに至つた。蓋し當時白奴の状態は、大概左の如くである。

ウエスレーの時に當つては、不品行、腐敗、墮落の状態殆んど其極端に達したと雖も、未だ生活上に大なる困難は感じなかつた。酒を飲み、妾を蓄へ、博戯を試む、然し之れ尙ほ爾か爲す餘裕あるを示す。然れども十八世紀の末に至つて

は、英國は決して此かる樂天地では無かつた。那翁の大戦一たび英國の天地を震撼し來るや、僅に千四百萬の人口を有し、四五百萬人の青年を有したるに係らず、直ちに百萬の大兵を擧げざるを得ざるに至つた。之れ已に善く其國の堪えざる所、加るに財政益々困難を極め、子供の獨樂にまで税を課し、馬の轡にまで税を課し、家の窓にまで税を課し、往來の道にまで税を課するに至つた。さればウオータルローの一戦によつて、榮を海外に揚げたとはいへ、國內の疲弊擧て數ふべくもなく、耕田は草を生じ、果園は荆棘に充ち、下民は物價の騰貴の爲めに其食を得るに處なく、人口の大半は全く饑饉に瀕すとまで叫ばれるに至つた。されば渴するものは飲を擇ばず、餓ゆるものは食を擇ばず、如何なる勞働にても、如何なる虐待にても、更らに不平を唱ふる違なく、押して相群集し來り、其身を財産家企業家の前に挺するに至つた。時は綿線器械發明せられて、米國より輸入し來る

綿額其數を増し、萬國に輸出する百般の綿類は、殆んど英國の專賣に歸したるを以て、獨り此業のみ倍々其盛大を極め來つた。是に於て貧民貧兒の此處に集るもの、幾千幾萬を以て數へられるに至つた。然しながら其狀況の悲惨なることは誠に云ふに忍びざるものであつた。職工に二種類ある、一は年期奉公を約して來るもの、一は自由の約束を以て來るもの、是である。斯くて大人は使ひ易からず、且亦輕便ならざるを以て、多くは皆童男童女を取つた。此を以て悲惨益々甚しく、時の之を記するもの曰く、「試に倫敦若くはウエストミンストルの貧民窟に來りて見よ、此處は是れ輦轂の下である、然れども輦轂の下に地獄がある、其鬼たるものは何物ぞ、曰く諸方より貧民窟の兒童を買はんとて來るもの、是である、彼等は先づ貧父若しくは貧母を執へ、幾年を限り價格を定めて其貧兒を買ひ、之を買ふや否や、其子の遁げざらんが爲めに、先づ之を珠數繫にし、之を荷車に

積み、若しくは之を溝船に乗せ、親の泣くもの、子の叫ぶもの、哀別離苦の人情を馬耳東風と聞き流し、制して聴かざるものある時は、直ちに鞭を揚げて之を打ち、之をして再び聲を上げざらしめた。斯くて製造場なるマンチエヌトル若しくは其他の所につれ行くため、更に之を車主に渡し、又賣買の談判を開く、斯くて其談判を開く間は、恰かも馬鈴薯の如くに、之を納屋若しくは小屋に押込め置き、談判漸く定まれば、即ち車主が之を器械場に運ぶのである。其惨虐なること、悲惨なること、實に見るに忍びざるもので有る。然し之れは漸く悲惨の入口にして、悲惨愈々加はるものあるを忘れてはならない。彼等は如何にして働くか、其小なるは五歳より、其大なるは十六七歳に至る、如何に働かんと欲しても働く能はず、如何に働かんとしても、身の幼弱なるを如何にせんである、然し鬼は決して之を許さない。諸君は幾時間彼等が働くと思ふか、食事毎に三十分の休業を與へらる

る外、彼等は十六時間、若しくは十八時間の長さ間、引續いて働かせらるゝのである。例へば朝の六時から夜の十時まで、若しくは十二時まで、引續いて働かされるのである。彼等は如何なる所に臥すか、其は暗く、臭く、虱の集る、垢の冷かなる、腐れたる蒲團の裡に臥するのである。然かもそれさへ其労働の激しさが爲め、彼等の安宅であつた。彼等は其臭を厭はず、其暗を思はず、垢と虱の間に轉げ込むのである。彼等は何を食ふか、硬き臭き悪食のみ、然かも彼等は飢に瀕して只其の足らざらんことを是れ恐れ、私かに主人の豚の食を奪はんとて、之れと相争ふに至つた。彼等の中、長い鎖で其兩足に足楯をはめらるゝものあるは何が故か、是れ彼等が逃れんとして捕へられ、遂に鎖に繋がれたものである、然かも彼等は牢獄の中に其身を休むること能はず、同じく鎖の儘にて働き、同じく鎖の儘にて歩み、亦同じく鎖の儘にて寝ざるを得なかつた。彼等の腕と頭に蚯蚓脹

あるは何が故ぞ、是れ彼等があまりに疲れて眠らんとし、若しくは聊か休まんとしたる時、番人の爲めに打たれたのである。ムーアランドの裏の彼方、草腐れ地濕りたる處に、土塊の累々たるものがある、是れ果して何物ぞ、之れ製造場の鬼共が、幼稚なる童男童女を懲らす時、若しくは之を罰する時、往々死に至らしめたる結果である。彼等の父母は之を知らず、病んで哀れに死したりと思ふ。然かも稚童其物に取りては、是れ苛責を免れたる天の門なりとは、嗚呼誰か之を悲惨と謂はざるものがあらうか。之れ殆んど地獄の小説の如くである。然かも之れ現實基督教國なる、我生國英國に行はれつゝある事實である」と云々。

リチャード・オーストルは、此等の慘況を目撃したのである、熱腸の男子焉んぞ之を傍觀し得やう。直ちに雷電の筆を振つて、時の新紙「リード・マキユレー」に投書して、大いに輿論を喚起した。是に於て賛同する者、辯難する者、續々紙

上に現はれ出で、彼の黒奴の大論に加ふるに、茲に更に白奴の大論を以てするに至つた。

二

此に又ロベルト・オーウエンなる者があつた。當時又此の白奴救助の情に動され、幸にニュー・ラナークの綿車の主人たりしを以て、獨りオーストルの如く議論を以てのみ之れに當らず、實際の解決を此に試みた。先づ四五百人の童兒を集め、之れに教育をも授け、徳義をも教へ、之をして牛馬や犬豚の如くならしめず、生長の後之をして人らしき人たらしめんと欲し、此に大に努めたが、到底當時の如く十六時間若しくは十八時間の勞働に加ふるに、此に重ねて教育を彼等に施さんには、適々以て重荷を彼等に加ふるに過ぎざるを知つて、始めて此に十時間勞働

問題を提出するに至つた。

十時間労働問題、之は實に英國の社會改良史上に特筆大書すべき畫期的の大問題である。英國には十八世紀の終から十九世紀の初にかけて、諸種の紡績機械が發明せられて、産業革命が捲起された事は、何人も知る所である。而して其の爲に、英國の紡績業は、空前の大發達を遂げたが、其の一方、其の紡績工場に労働せしめらるゝ白奴の慘状は、上述の如くであつた。もとより當時の英國にも、義人無きに非ず、此の白奴の爲めに盡力し、既に政府側に於ても、一二の法案が、創定せられざるにあらざりしも、其は未だ白奴の根本問題に觸れざるものなるを以て、白奴の慘状は依然たるものであり、且つ蒸汽機關が、水力に代つて、廣く工場に用ひらるゝに至つて、白奴の慘状は、更に甚しきもので有つた。左れば此の白奴の問題の根幹に、大斧鉞を加へしものは、實に此の十時間制の労働問題

大斧鉞

であつた。人間一日の労働は少くも、十時間に制限せられざる限り、凡百の法規は眞に空文に歸する、而して一旦此の十時間労働問題が、強行さるゝとせば、其の他の難問題は双を迎へずして解決さるゝ。眞に十時間労働問題は、白奴解放の唯一の鍵鑰であつた。當時此の白奴問題に對して、廣汎にして理解の透徹したる大運動の、始められたのは、千八百三十年である。これより數年してシャフツベリー侯が推されて、此の大運動の指導者となつたとは云へ、其の最初は、リチャード・オーストル、ジョン・ウツド、デー・エス・ブル、ウォルカル、フィリップ・グランド、其他の人々の一群に依つて捲起されたのであつた。色々の文書が新聞雜誌に書き立てられ、色々の集會が開かれ、労働者間には、大センセーションが起ると同時に、工場主は大同團結して之に對抗し、双方より上下兩院に、請願書が提出され、すべての工場地方は、日を追ふて物情騷然として、由々しき社會問題

シャフツベリー侯

題化して来た。此時下院の有力なる、又た此の運動に燃ゆるが如き同情を有する議員ミカエル・サツドラルが、衆より推されて下院の指導者となり、千八百三十一年の議會の終り頃に、サツドラルは「十時間労働法案」を下院に提出し、翌千八百三十二年に、愈々議場の大問題となつた。即ち時の大問題たる奴隸禁止案が未だ議案を通過せざる二年以前に於て、又々更に一大問題として、右十時間労働法案が議院の大問題となつたのである。サツドラルの其動議の演説の大意に曰く「諸君は奴隸禁止を主張する、余も亦た大に之を賛す。然れども遠く之を殖民地、若くは遙か之をアメリカの彼方に求めて、而して之を眼前の帝都、若くは之を骨肉同胞の間に求むることを爲さざるは何故ぞ、看るべし、目下白奴の状態の悲惨なる、蓋し黒奴に倍するものあつて存す。彼れ黒奴たる幸に多年諸君の盡力により、今や全廢に至らざるも、猶ほ且つ其の労働時間は、大人は十時間、幼童は六時間

の寛典に預るを得る。然るに、翻つて此の白奴に見よ、幼童にして十三時間、若くは十四時間の労働を無理押せらる、諸君は已に黒奴を憐れむを知る、何ぞ白奴を憐れむに吝なるや」と熱血を濺で、大に論辯するところ有つた。然しながらサツドラルの大論も、其の反對者の多數なるが爲めに通らず、止むなく此の問題に就ての調査委員會の設置に應ずるより外無かつた。此時リチャード・オーストルも機即ち乗すべしとなし、例の健筆を揮て小説的に事實を描き、之を世上に訴へた。其文に曰く「茲に六七歳の稚童あり、毎曉氣遣ふて眠る事能はず、七回となく、八回となく、睡むき眼を開けながら、父よ時にあらずやと、尋ね問ひ、漸く時どと云はるゝときには、乃ち氣を勵まして起き上り、冬の寒き風の朝、襦袢の薄衣を纏ひながら、氷の路を急ぎ行く、然而して若夫れ雨に逢ひ雪に遭ひたる曉には、泥濘に難み、積雪に苦むこと、蓋し其幾回なるを知らない、斯くて漸くに

シャフツペリー侯

して數哩の途を辿り來るや、十三時間、否、甚しきに至りては、十八時間の勞働に従事せしめられ、其間僅か食事毎に三十分の休息を與へらるゝのみ、十三時間……是れ朝の七時より、夜の八時に及ぶ、十八時間……是れ如何なる數ぞ、即ち曉の六時より夜の十二時に及ぶ、斯くて深更に至りて其歸るを看よ、彼れ弱りて歩む能はず、路に蹶き轉ずるあり、氣を失ひて倒るゝあり、而して遂に死するに至る、嗟呼悲惨！然も是れ實況にして、余が畫く此子は即ち斯くて死し去つたのである」と、憤慨一番、紙面淋漓、筆端血を濺で大に之を訴へた。然ども更に其効を見ること能はず、サツドラルの議案は上述の如く、大少數にて敗れた。志士の遺憾實に譬ふるに物ない。然れども誠士は曾て失望せぬ、眞理を信ずるものは、一時の成敗を以て決して其心を動すべきではない。茲に本文の主人公たるシャフツベリー侯は、此時まで敢て白奴の爲めに大に訴ふる處なかつたが、此時感

奮禁すること能はず、此年はこれにて終りしが、其翌年、即ちウィルバルフォースの後繼人フオーエル・パツクストンが奴隸禁止に於ける最後の大演説を爲したる時、シャフツベリー侯は大に之に賛成すると同時に、茲に其前年に敗れた白奴案、即ち十時間労働法案を復活せしめ來つて、之を自身の双肩に負ひ、獅子奮迅の勇を現はした。されど傳者は云ふ、此時議員の多くは之を聽て笑つたと、而してリチャード・ゴブテン、ジョン・ブライトの如き有名なる愛情慈眼の士も、亦た其議場に在りたるが、却て反對の位置に立ち、シャフツベリー侯の議を微笑の中に斥けたのである。以て當時の大勢を見るべきである。

抑々シャフツベリー侯とは如何なる人ぞ。彼は家は代々貴族にして、名門の出である。當時は貴族にして社會問題等に心を傾ける者は、極めて罕であつた。嘗て罕なるのみならず、孰れも皆平民を敵視し、共和黨を企つる者は彼等なり、階

級を毀つ者は彼等なり、彼等は到底貴族の友に非ずとなし、彼の歐洲大陸に於ける平民囂々の聲に警して、大に自由の聲を恐れしかば、英國の貴族は大抵保守黨にあらざるなく、平民の窮するを見て、却て自笑する有様であつた。さればシャフツベリー侯も、元來平民の味方たる筈が無いのである。然るにも係らず、シャフツベリー侯が平民の味方として、社會改良家として其の一生を貫ける事に就ては、蓋し其の原く所が有るのである。

シャフツベリー侯は、其の生涯を通じて、人から宗教生活の發端を尋ねらるれば、其は未だ幼き八歳の時、彼の乳母マリア・ミリスの感化によるものであると、言下に答へるのであつた。此の乳母は、彼の母が未だ嫁がざりし以前よりの、母の侍女であつた。彼女は純真にして愛情深く、信仰篤き女であつた。シャフツベリー家に忠實なる婢なりしのみならず、亦た神に對して忠實なる婢であつ

た。乳母は幼きシャフツベリーを愛し、常に膝に抱き上げ、色々の聖書の物語をして聞かせた、殊にベツレヘムの秣槽とカルバリーの十字架の物語は、幾度となく繰返された。乳母は又幼きシャフツベリーに素朴なる祈禱を教へ、其を暗誦せしめた。其の祈禱は、彼が其後艱難に遭逢する毎に、常に繰返され、殊に晩年病氣の時には、幼き時乳母に教へられし此の素朴なる祈禱は、常に唇邊に繰返された。斯くしてシャフツベリー侯の宗教生活が芽生え、未だ七歳の幼童にして、早く已に神を思慕するの情を起したのである。同様に、人から社會改良家たらんと決心した動機を尋ねらるゝ時には、彼は常に十四五歳の時経験して、終生忘る能はざりし物語をする。シャフツベリー侯が、ハローの學校に在學中の或一日、散歩しつゝあるに際し、横町に只ならぬ一群の叫喚と亂聲を聞いた。突如として眼前に現れ出でたるは、四五人の泥醉漢が、一棺を擁したる葬式であつた。葬式

か彼の眼前に現るるや、踴躍たる此泥酔愚連共は、足並亂れて棺をば大道に放出し、叫喚亂舞した。少年のシャフツベリーに取つては、眞に驚魂駭目の光景である。嗚呼是れ何たる凄状ぞや、同じく人と生れながら、生きては茅屋の隅に住し、死しては擔夫に其身を委ね、之を葬るものあることなく、悄乎として墓場に往く、其の送葬者の容體を見れば、孰れも皆泥酔して嚙語を吐くあり、瀆言を放つあり、而して決して死者を葬る如き感想あることなく、恰も犬豚を葬るもの、如くである。シャフツベリーは暫くは嗒然として其場に立盡し、「嗟乎、これ何たる事ぞや、人は貧にして友無きが故に、斯くの如き言語道斷の所爲を蒙る可きか」と叫んだ。やがて此の荒涼至極の葬式が、叫喚と亂舞と共に過ぎ去りし後に、シャフツベリーは、己れの將來に就て思案した、斯くて彼は、神の擁護の下に、此時よりして貧困と無告の同胞の爲に、己が一身を捧げんものと、深く心に決したのであつた。

た。

斯くて十九歳に及んでオックスフォード大學校に入つた。オックスフォードは是れ即ちウエスレー、ウィルバルフォース等を出したるもの、其社會問題に大關係を有したるもの、然らば則ちシャフツベリー侯が此處に其感化を受けしや知るべきである。オックスフォード大學を卒業して間もなく國會に入りしも、始めは敢て大論を吐く事もなく、名説を出す事もなく、一見平凡々々であつた。然るに遂に千八百二十八年に至り、此にシャフツベリー侯をして社會問題に觸れしむる者が出で來つた。當時ロベルト・ゴルドンなる者あり、曾て癡狂院の改革を主張して已まず、從來英國に於ては、癡狂を一種惡魔に憑かれたる者と誤認したるを以て、之を遇すること苛酷に過ぎ、嘗に癡狂者をして益々危殆に陥らしむるのみならず、往々之を死に至らしめたるを見て、ロベルト・ゴルドンは主張して曰く、

シャフツベリー侯

之れ畢、竟病者のみ、病者を遇する決して苛酷なるべからず、宜しく學理的に其病源を講究し、之れが治療の道を求めざるべからずと、遂に國會に訴へ、從來癡狂者を虐待したる最も慘酷なる例證を擧げ痛く之を人情に訴へたのである。シャフツベリーは其十四五歳にして、既に人情に動きたるもの、其のオックスフォード在留の日も、曾て社會問題に其意を傾けたるもの、如何で躊躇する事を得やう、即ち猛然起つて之を賛し、始めて氣焰を議場に吐いた。是れ實にシャフツベリー侯が二十九歳の時にして、即ち彼が愈々社會問題に其身を投ずる劈頭第一の問題であつた。夫より五年を経て、千八百三十三年、彼の英國歴史中有名なる改革案の議場に提出せらるゝや、シャフツベリー侯は即ち又奮然其身を改革黨に入れた。其地位より曰へば、彼は即ち貴族である。其黨派より曰へば、彼は即ち保守黨に屬す。然れども、彼が一片歌々たる人道心は、遂に彼をして其身を忘れしめ、其

黨派を忘れしめ、奮て改革案賛成者の一人として立たしむるに至つた。されば平民黨は事の意外に出でたるを喜び、彼を稱して平民の友と呼び、下民の救護者と稱するに至つた。

三

千八百三十三年の選舉法改革に依つて、總選舉が行はるゝや、不幸にもサツドラルは落選した。これ實に十時間労働運動に取つては、一大事であつた。何となれば、下院に於て挺身努力、此の運動の爲に専ら其の任に當れるは、上述の如く此のサツドラルであつたからである。そこでランカシャイアルとヨークシャイアルの同志が相會して、其の善後策を講ずる事となり、先づ以てジー・エス・ブルをロンドンに派遣して、ロンドンに於ける同志に其の意見を傳へ、なほロンド

ンの同志と商議せしめた。其の結果、此に愈々シヤフツペリー侯が、此の世に就ける一切の事務を放擲して、此の十時間労働運動の爲に、身を投ずるに至つたのである。ブルはサッドラルと相談して、其の同意を得て、平民の友なるシヤフツペリー侯の蹶起を促し、シヤフツペリー侯は熟考の末、快く其を引き受けた。ブルは此の快報を同志に通じたが、其手紙に、次の如く記して居る。「シヤフツペリー侯其人は如何なる人物かと云へば、侯は高貴なる精神と、仁慈なる心の持主にして、且つ不撓の決意を藏する所の丈夫である。私は侯と屢次會見の機を得たが、何時の會見に於ても、侯は極めて懇懇丁寧である。或時の會見に、侯は私は此の運動には、ただ满腔の熱意と、全幅の誠意を以て當るのみである。私は此の運動に就て、何等自ら誇る可き功は無、其等は全てサッドラル氏に歸す可きものである。私が敢て此の問題を一身に引受くる所以のものは、私を外にしては

他に其人無きが故である。私は、平明卒直に申上げるが、諸君等が斯くの如く熱誠を以て、私に望む所のものを、私は決して拒み得ないのである、そして私は、斯くする事が、私が神と貧民に對して負ふ所の義務なりと信じ、且つ神は必ず私を助け給ふであらう事を信ずるからである、而して百難萬難はもとより期する所である。若し我等が其を厭ふならば、我等は果して何の爲に議會に議席を有するかと疑はるべきである。」と云つた。……私は今、侯の所から歸つた所であるが、侯は一層決意を固めて居る。侯が云ふには、之は諸君の仕事である、若し諸君が侯を助ける限りは、侯も亦た飽迄も初一念に邁進するとの事である」と。斯くして十時間労働運動は、シヤフツペリー侯の双肩に懸る事となつたのである。然しながらシヤフツペリー侯が、神と貧民に負ふ所の己の義務を痛感して、一身に十時間労働運動を荷ふ可く、大決心するまでには、侯は容易ならざる心の苦

闘を経たのである。侯は今、其生涯に於て、明暗の岐路に立つたのである。一方の道は坦々たる大道であり、然かも其道を選べば、一身の権勢と榮達は思ひの儘であり、多くの友人は期せずして侯の身邊に圍繞し來るのである。而して他の道は、崎嶇險難の道である、あらゆる反對の嵐の中に立たねばならぬ、絶えざる勞苦と不斷の苦杯を嘗めねばならぬ、友には背かれ、安易の生活は許さる可くもない、そして一生を貧民の群に投せねばならぬのである。侯は、此の二つの道の何れを、選ぶ可きか、若しも侯が政界に野心有りしならば、侯の實力と、侯の人氣と、侯の雄辯を以てすれば、其の所屬の保守黨の指導者となり得る事は、易々たる事であつた。然しながら侯は、決然として、神と良心の命じ給ふ通り、荆棘の道を選んだのである。侯自らは既に決したるも、然かも侯には最愛の夫人が有る、又子も有る、今は一切の家庭の幸福をも犠牲にせざるを得ない、侯は己が決心を

夫人に開陳して、今後來る可きあらゆる苦惱と、弱き女の身には或は堪ふ可くもない重荷を説き示して、夫人の意見を求めた。其時夫人は、嫣然且毅然として「斯くなすその事が郎君の義務でありませう、餘の一切の事は顧慮するに及びませぬ、遲疑逡巡するに及びませぬ、勝利を得るまでは、飽までも初一念を貫いて下さるやうに」と、斷言した。斯くして侯は、後顧の憂が無く、安んじて一身を白奴解放の爲めに放擲したのである。我等はシャフツベリー侯を偲ぶ時、その蔭に隠れたる侯の夫人を忘れてはならぬ、侯の夫人は、其までは信仰篤く愛情濃かなる、良き妻であつた、而して其れ以後は侯に取つて、眞に無二の内助者、無二の慰安者、無二の獎勵者となつたのである。

斯くしてシャフツベリー侯は起つた。千八百三十四年には、前述の如く十時間勞働問題に賛成し、其翌々年即ち千八百三十六年には、自ら進んで工場條例案を

提出したが、是亦多數の笑草となつて敗れた。然れども、彼は既に其志を定め
 たれば、勇往邁進、又踵を回らす可くもない。於此乎、此處に炭坑場裡なる暗
 黒界の惨状を探り來つて、遂に之を議場に暴露するに至つた。今其事實を云へば、
 刻下英國の諸炭坑場の惨状實に云ふに忍びざるものが多い、大凡此に使役せらる
 るものは、多くは八歳以上十三歳迄の小供である、之れは坑徑の小なるが爲めで
 ある。大凡此に働く者は、終日終夜坑中に在つて、日曜日一回太陽を見るの
 みである。其爲す事は何事ぞと云はゞ、其脊に鞍を掛け、其鞍に小車を繋ぎ、之
 を繋ぐに重き鐵の鎖を以てして、容易に斷るゝ事なからしめ、而して其の行くや
 行にあらずして這ふのである、小徑を這ふのである、臭氣鼻を穿つ水道の傍を這
 ふのである、其往くや空車たるを以て、或は難からざるも、其歸るや炭礦車上
 に堆く、之を曳くこと容易ならず、臭氣を吸ひ泡を吹き、全身汗に濕ふて手足

進み難く、肋は磨れ剥げ、脊は破れ、掌と膝とは其這ふが爲めに爛れ、痛苦殆ん
 ど堪え難く、於此乎、滑べり轉び、途中氣絶する者亦頗る多く、若し夫れ之を
 して一時間若くは數時間の間たらしめんには、尙其も可なりであらう、然るに暗
 黒場裡の事として、敢て之を見るものなきを以て、之が鬼たる監視者は、常に鞭
 を以て之を驅り立て、之をして大抵十八時間若しくは三十六時間も、休憩を與へ
 ず、絶えず働かしむると云ふ、而して其容状を問へば、工人は大概赤裸で婦人も六
 歳より二十一歳位までのものは是亦大概裸體で、單に其腰部に湯巻様のものを著
 するのみである。さらば其不道德の行はるゝは、恰も禽獸界と異ならざる状態を
 呈し來るは、亦自然の數である。是れ當時國會が委員を選び、親しく調査したる
 報告である。然ればシャフツペリー侯の如きものが、怎して之を等閑に附し去る
 事が出來やう、彼の癡狂院問題を始め、十時間労働問題を始め、而て茲に此大問

題を始め、侃々諤々、争ふて已まず、シヤフツペリー侯の名は遂に大に世に揚るに至つた。然しシヤフツペリー侯は之を以てなほ足れりとせず、益々進んで活版工場を視察し、レース製造場を視察し、陶器場を視察し、裁縫場を視察し、製帽場を視察し、而して遂に農業場を視察し、何れも労働者、或は職工の爲めに同情を表し、益々十時間労働問題の必要を感じ、之を叫ぶこと多年、遂に千八百四十七年彌々之を議會で通過せしめて、茲に初めて、リチャード・オーストル、ロベルト・オーウエン等が叫び始めたる十時間労働問題の大勝利を見せしむるに至つた。是れ蓋しシヤフツペリー侯が力に歸すべきものである。

シヤフツペリー侯は又教育問題に其身を置き、千八百四十三年、貧民教育問題案を國會に提出した。又煙突掃除に於ける兒童の無告を憐れみ、是を廢棄せん事を訴へ、監獄の改良を論じ、囚人にすら同情を表し、是れ獨り彼等囚人の罪のみ

でない、亦社會の罪に歸す可きもの多しと論じ、サー・アンドリュ・アクニユーが安息日確守の法律案を國會議場に提出した時も、亦首として之を賛成し、是れ實に労働者の救ひたるべしと述べるなど、大凡事苟くも人道に關するもの有る時は、忽ち身を投じ、以て縦横無碍に運動した。於此乎一日議場にて或人戯れに問ふて云ふには「君は夫れ何く迄往くぞ、何を其提出案の多きや」と、シヤフツペリー侯直ちに答へて曰く「大凡悪事が天下の間に除かるゝ迄、余は往き往きて已まぬものである」と。其剛意精神の在る所を見るべきである。

シヤフツペリー侯は又ロンドンの貧民窟を探つて報じて曰く、茲に一棟の下宿屋がある、長十八尺幅十尺の間に、二十七人の大人と三十人の小供と三頭の犬と、相共に混じて、藁と鉤屑と糞糞の上に臥しつゝある、又其の最高階に至つては、僅に十二尺と十尺の間に、六臺の寢床を設け、この上に三十二人の寝ぬるの

を見た。於此乎、又更に下宿改良案を國會に出した、而して又謂ふに、凡そ衛生は百善の本、身體健全ならざれば、何を以て勞働に堪えやう、教育の土臺も亦衛生から始めざるべからず。然るに出で、は塵埃の工場に働き、入つては臭氣鼻を打つ下宿に臥す、是れ正に人を殺す社會である。於此乎、又た公園の開設、公湯設置の必要を述べ、益々社會の間に其歩を進め續けた。彼は又た眼を轉じて海外に及ぼし、目下勞働者の益々窮する所以のものは、畢竟するところ、機械の發明頻繁にして、人手を要するもの從て減じ、勞働者の過剰を見るに至つたからである。之を救ふには、よろしく之を海外に移住せしめ、若くは之を殖民地に送るべしと云ひ、移住民獎勵會なるものを起し、傍ら政府をして大に之を助けしめた。又宗教界にも其身を入れ、内は内國傳道會、外は海外傳道會社に其關心を持ち、社會改良の義は、唯り法律に依つて期すべきでない、若し夫れ

拔本塞源の道に出でんと欲すれば、よろしく宗教に依らざるべからずとなし、内國傳道者を派して貧民窟に入らしめ、之に肉體の食を與ふると同時に、亦之に靈魂の糧をも與へ、靈肉共に其徳に依らしめた。又印度、土耳其、シリア、エルサレム等の傳道にも其力を入れ、聖書會社、書類會社等の役員をも引受け、屢々當時始めて起つた青年會の會長をも勤むるに至つた。左れど其最も力を盡して、専ら其職に當つたのは、所謂襁褓學校である。候は翹に貧民教育の問題を議場に提出したるのみならず、身自らその校長となり、而して茲に貧兒學校、孤兒院、勞働會、感化院等を設立し、數百の教師を置いて之が教育に従事せしむるに至つた。然ば民間の評判は大變なものにて、或は候を貧兒の父と呼ぶもあり、勞働者の友と呼ぶもあり、社會の恩人と稱するに至つた。

四

或日の事、拐兒が途に侯の金時計を掠め去つた。侯歸り來つて、笑つて人に語れば、皆曰く、「彼奴何する者ぞ、侯は夙に墮落者の友を以て任じ、盗人すら猶ほ改善の道ありと説き、世人が棄て、顧みざるものをも、之を憫れみ、却つて之を子の如く愛し給ふに、彼奴如何なるものぞ、即ち恩人の時計を盗み、徳に酬ゆるに仇を以てする、彼等は終にそれ化す可からざるか」と。侯の曰く、「否々、未だ容易に置くべからず、例證歴々實際に在る、盗人必ずしも生れながらの盗人にあらず、境遇彼を驅るもの多し」と、例の寛大の心を以て、猶ほ之を罾らなかつた。數日を経て後、玄關より何物かを投じつ、槍惶として去りたる者がある、僕が出て見れば風呂敷包である。開いて之を見れば、即ち侯が盗まれた時計である、

そして一封の書が其内に在る、其語に曰く、「君よ願くはこの不知恩者を免し給へ、奴は實に其候なるを知らなかつた、然れども掠め來つて後之を聞けば、斗らざりき目下雷名の賑恤者、貧者の恩人、而して遂に奴等天下の罪人にまで其慈心を傾け給ふ、シャフツベリー侯其方ならんとは、奴は實に奴の手の腫れざりしを怪しむ、冀くは之を恕せ、奴は再び侯のものに觸れざるべし、謹んで之を返す」云々と、書てあつたと云ふ。

又此に一の興味深き挿話がある。其は一千八百四十八年の事である。或日侯は一通の書を傳達された。開いて見れば、當時ロンドン市に其名を賣つた四十人の盗人共が、連署の書にして、六月二十七日の夜某所に於て侯に會見したい、と云ふのである。實はロンドン市傳道會社の傳道師に、トマス・ジャックソンなる者が、ロンドンの罪惡の巢窟なる貧民窟に傳道して、盗人傳道者なる名を取つた者

シャフツベリー侯

があつた。ジャックソンは熱誠眞摯、此の盗人社会には持つて来いの力ある傳道者にして、盗人の社会とは眞に割無き仲となり、彼等の性癖と罪惡に悉く精通して、萬解の同情を以て彼等に接して居た。シャフツベリー侯が、少年犯罪者をば移民せしめて、彼等に新しき運命を開拓せしめよと云ふ議案を、下院に提出した頃、ジャックソンは一人の大人犯罪者に、「君も移民する氣が有るか」と問ひしに、「其は願ふても無きところ」と、言下に答へた。そこでジャックソンは大いに力を得て、此種の犯罪人のみの會合に於て、同様なる質問を彼等に提出したるに、矢張り、「其は願ふても無きところ」と、異口同音に答へた、而して其中から一人が立つて、「然らばシャフツベリー侯に、我等及び我等の仲間が現在の境遇から脱するには如何にしたら宜しきか、侯の意見と指導を乞ふではないか、其には一つ侯が來つて我等に會つて下さる様に、手紙を書いては如何に」と、提議した。さ

てこそ其中最も兇惡なる犯罪者四十人の連署となつて、侯に召請状を送つたのであつた。侯は其迄、屢々思ひも掛けざる會合や場合に遭遇したりとは云へ、未だ會て斯くの如き盜賊團の召請に接したる事は無かつた。然れども侯は、何等躊躇する事なく、何等懼るゝ事なく、其當夜召請に應じて、單身祕かに其會合に臨んだ。會場に至れば、其入口に盗人仲間の親方株數人頑張りて、一々出入の者を検査し、四五人の者は殊に嚴重なる検査を受けたる後、矢張り彼等と同様に、犯罪人仲間なるを確かめられて、入場を許されると云ふ有様であつた。侯が會場に導かれるれば、連署人は四十人であつたが、其處に集りし者は、實に四百五十人の多きに達して居た。ソコで侯を見るや、一同は侯を慰勸且熱誠なる態度を以て、迎へた。侯は後に其時の事を人に語りて曰く「予は、其處に集れる盗人連は如何なる種類の者共かを、知らんとした。ところが、其處には拘摸も有り、萬引も有

り、搔拂ひも有り、其中の或者は蕭洒たる服装をしたる者も有たが、然し多くの者は、靴下を穿たず、或者は襯衣を着て居ない。予は此の仲間の種別を知らんとしたところ、ジャックソン君は、彼等に、君達の中盗賊其他極悪の犯罪に依つて生活する者は右側に、其他の者は左側に整列せよと命ずると、約二百人は直ちに立つて右側に行つて、彼等は盗賊其他極悪の犯罪者なる事を明かにした」と。侯は此に於て、懇切且毅然として、自分は自分の義務の爲めにも、又彼等自身の爲にも、今後彼等の良き友たらん事を言明し、彼等各々の云ふところを聞かんと申出た。すると其處に集れる者共は、もとよりすべてを打開けん爲に集れる事を自覺して何等藏す所無く、至ての眞實を語り出したが、「其の珍奇なる、其の寫實的なる、其の刻明なる、其の感動的なる、實に未だ曾て聞かざる所のものであつた」と。侯が自ら云ふ如く、實に惻々たる眞情を吐露したるものであつた。ソコで侯は聞

終つて彼等に、自ら頼むべき事、従前の惡しき行を悔改める事、將來に對して新たなる決心を堅むべき事を説いた。すると一人は、「左様に仰せられても、我等が此次の集會までに、我等は如何にして其日を過すべきであるか、我等は盗むか然らざれば死するばかりである」と、悲痛の言を吐いた。侯は、此時程此の仕事の重大性を感じたる事は無く、又同時に、此時程己れの無力を感じたる事は無かつた。そしてジャックソンが「祈禱せよ、神は君等を助け給ふぞ」と祈禱を促すと、一人が起つて「閣下よ、又世の裁判官の紳士諸君よ、祈禱は善い事である、然し其は空虚なる腹を満すものではあるまい」と云つた時に、ヒヤ／＼の聲が會場の至る所に起つた。侯は此の一堂の罪の子等に對して、無限の同情を禁ずる能はず、暗涙を呑んだ。此の夜の會合にて明かにされた事は、これまでの生活に満足なものは一人も無く、其境遇から脱する方法さへ有れば、如何なる困難をも願

みる所に非ず、と云ふ事であつた。そして總ての者が、熱心に希望する事は、移民に依つて彼等の新生涯に入らん事であつた。侯は己れの力の限り一同の爲に盡力せん事を誓つた。すると一同を代表して一人が「然し閣下は再び我等と會つて下さるか」と問ふと、侯は「勿論である、何時何處にてもあれ、君等の希望に應ずるであらう」と答へた。此の答を聞いて、低く深く力強き感謝の動搖めきが、堂内に起つた。其後三ヶ月にして、其中の十三人はカナダに新生涯開拓の途に上り、なほ間も無くして、約三百人は、或は移民し、或は新職業に就き、斯くして彼等は各々光明の世界に浮出づる事を得たのであつた。

嗚呼吾人は彼の拐兒の談を聞き、今亦此盗人の改悛を聞き、其シャフツペリー侯が如何に大勢力と、大感化とを當時の社會に及ぼしたりしかを見て、私かに欽慕の情に堪えない。さればにや、一千八百四十八年、彼の暴民が大舉して國會議

場に迫り、以て其過大の自由を得んと試み、人心恟々ロンドン市内殆んど鼎沸の狀を現せし時、時の内務卿グレーが、直ちに馬車を侯に驅り、幸に侯の人望を以て、此暴民の鎮靜に一臂の勞を執り給はん事を願ひ、侯も亦直ちに諾し、即ち數十人の市内傳道者を各所に馳せ大に努力する所あつた。さてこそウエリントンが率ゐ出したる二十萬の軍勢よりも、侯の慰言が却つて其效を奏したりと云ふを聞くも、亦た其徳力の無限なるを知るべきである。

嗚呼、吾人は叙し去り叙し來りて、今やシャフツペリー侯が全盛の大時代に達した。侯の其始めて立つや、工場主は罵り、貴族は身中の蟲と怒つた、然れども今や侯がマンチェスターに往けば、工場主は即ち出迎へて喜んで曰く、「我等は嚮に侯を敵と思つた、然ども今にして知る、侯は獨り職工にのみ親切なるのみならず、亦能く吾人工場主を益した、何となれば彼等は鞭に驅らるゝよりも、自由の

意思にて働くに於て、却て精忠を示したからである」と、貴族も亦遂に侯の説を了して曰く、「吾人は前に侯を以て徒らに下民を煽動し、下民をして益々共和政體の誘惑に陥らしむるものと思つた。然れども今にして始めて知る、貴族の壓制は、即ち却て共和政體の逆運を來たすもの、殷鑑昭々大陸に在り、嗚呼侯は遂に吾人の敵に非ずして味方である、獨り人道の友のみに非ず、即ち平和の友である」と云々。乃ち仁者無敵とは蓋し侯の謂である。斯くて侯は一千八百八十三年、即ち侯が八十二歳の時、マンチエストルに往つて、勞働者を集めて演説して曰く、「嗚呼諸君よ、諸君は遂に予を失望せしめなかつた、其嘗て諸君のために、十時間勞働問題を議場に提出せし時、皆曰く、小人の閑居は不善の基なり、假令彼等の爲め勞働時間を減せしむるとも、彼等は其餘暇を以て飲食に耽らんのみ、彼等は動物の類である、飲食の外に道樂が無い、彼等は勞役の爲めに生れしものである

云々と。然れども諸君は我等を辱めず、果して我等の豫期せしが如く、益々善良の域に進み、衛生を重んじ、教育を喜び、遂に我英國の臣民たるに恥ぢざる資格を養はんと欲する、高尚なる地位に進みたるを見る。今にして敵皆其口を箝して、我等を贊す、是れ蓋し我等の功に非ずして、諸君の功である、諸君希くば益益道德と宗教と社會の道に進步せよ、而して我等の議論を實にせよ。夫れ國は諸君に依つて立つ。諸君にして墮落する、國即ち墮落するのである。諸君にして立つ、國即ち立つのである。何となれば國民とは他にあらず、即ち多くは諸君を指すのである。諸君願くは自重せよ」と云々。斯くて其翌々年即ち一千八百八十五年十月一日眠るが如くにして此世を去つた。

病 革つた最後の二ヶ月は、侯の最も愛したるフォルクスストンの地に、靜かに病を養つた。長い生涯に經過したる怒濤狂瀾の巷を離れて、深穩明晰なる心思

を抱いて、愛息愛嬢等に護られて、死の恐怖なく、確固たる信仰を持ち、永生を望んで、平静に最後の時を待った。侯の養痾の室は階下に在つて、前庭は見事なる芝生で、處所に樹木が茂り、其奏々たる樹葉は、芝生の上に濃き緑陰を作り、庭の彼方には海が見透される。侯は病間にはバルコニーに出て、清爽なる空気を呼吸する事が侯の最も喜ぶところであつた。晴れた日には、海の彼方に白く輝くフランスの彼岸まで遠望された。夕風の海は壯嚴にして美に満ちたものであり、侯の室は聖浄なものであつた、そして「來れイエスよ、早や來り給へ」とは、侯の平常の祈りであつた、而して祈の合間には、側に居る愛嬢や侍者に命じて、聖書の好ましき所を朗讀せしめた。又朝な夕な、詩篇の第二十三篇のダビデの歌、「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ……」を歌はしめた。そして十月一日、此日秋の日は燦々と陽光が照濺ぎ、侯の室は

侯が喜びとする光明に映えて居た。忠實なる侍者が命せられたものを侯に渡すと、侯は其を受取りつ、「有難う」と云つたが、其が最後の言葉であつた。即ち其から數分して、苦痛もなく、溜息もなく、興奮もなく、最後まで明晰なる意識を持續して、泊焉として天界に去つたのである。其世を去る迄、寢床の下に敷いた一葉の片布が有つた。一日家人は其古びたるを厭ふて絹布を以て之に代へんとした時に、侯は之を拒むで曰く、是れ往年我校の貧兒が手づから綴つて我馬衣に與へたものである。左れば予は是を寢床に敷き、常に貧兒の傍に在るを記憶しつゝ、永く此上に夢みたるものである、何ぞ今にして是を棄つるに忍びんやとて、遂に死に至るまで、其片布を放たしめなかつたと云ふ。一言の中萬斛の眞味あり、其今日下民に神視せらるゝこと、誠に故なきに非ずである。

昭和九年三月十七日印刷

昭和九年三月二十日發行

(定價金壹圓參拾錢)



320

著者 松村介石

東京市小石川區久堅町七四番地

發行者 葛岡龍吉

東京市京橋區銀座西八丁目五番地

印刷人 渡邊安雄

發行所

東京市小石川區久堅町七四番地

振替東京一四四八四番
電話小石川三五六五番

北文館

松村介石著

四六版上製函入

定價壹圓七拾錢
送料金拾四錢

堂々たる生活

著者は現代の青年が滔々として下卑たる外國かぶれの陋習に陥り、思想は惡化し風習は頹敗し、當年日東男子の意氣、地を掃つて喪失せんとする者あるを嘆じ、大にこれが改悛を警告せられつゝあるが、今回多年鬱積の宿志を披瀝し、此時弊の匡正に資する所あらんとして、本書を世に公にせらる。本書收むる所。我が主張、我が信條。餘修。名言小訓。泰西偉人逸話の五章數十節にして何れも潑刺生動の訓話。現代青年教養の好資料にして、特に青年團、青年訓練所等の好讀本である。

海老名彈正著

四六版上製函入
四百拾餘頁

定價金貳圓
送料拾四錢

日本國民と基督教

著者が我國基督教界の先輩として其第一人者たることは夙に一般人士の熟知する所である。本書は神、儒兩道によりて培はれた日本國民の敬虔なる信仰的精神が基督教によりて大成せらるゝ、所以の見地より日本國民と基督教の因縁を叙し、國民道徳と基督教、神社問題等を論じ、進んで基督教々義を説き、更らに著者の幽玄なる感想録を收めたる者にして、基督教者は勿論斯教研究者必讀の要書である。

工學博士 下村孝太郎著

四六版上製函入
總頁四百餘頁

定價壹圓七拾錢
送料金拾四錢

我が宗教觀

松村介石氏曰く 此書を一讀して實に驚いた。何に驚いたか曰く此の下村博士が
科學より哲學に入り、哲學より信仰に入り、信仰より體驗に到る迄の來歴が、其の
該博なる智識と深玄なる思索と敬虔なる心懷とによつて、織り成せるところの其の
錦が、實に目も眩せんばかりの立派さであつたからである。近來予輩の讀んだ中、
聞いた中で、宗教上においては此書ほど推薦したいものは外にない……。

661
26

